



【品性訓練(3)哀れむ心! その神様の祝福の法則】

今日の聖書本文:マタイの福音書9章12-13節/暗唱聖句:マタイの福音書5章7節

説教者:鄭南哲牧師

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん! 一週間もお元気でしたか。みなさんは最近の品性訓練についてどのように自分に適用しているでしょうか。品性訓練はすぐには変わらないかもしれませんが、しかし、絶対あきらめないで自分がさきに変えられるために、神様の御言葉と祈りをもってたえず、自分を訓練させていく人はかならず変えられると信じます。自分たちの努力によるのではなく、訓練させられたがる者を神様ご自身が助けて下さるからです。逆に、どんなに神様の御言葉を聞いても、聞いて終わってしまう人は一生涯教会に通ってもその品性は変わらないと信じます。みなさんは神様の御言葉をどんな姿勢、どんな心構えで聞いているのでしょうか。私はイエス様を信じればかならず、その人の生き方だけではなく、人格も品性も変えられると信じます。みなさんはイエスを信じる前と比べたらなにが変えられたと思いますか。御言葉を取り次いでいる私自身も牧師でもあります、この訓練を一生されないといけなほど、足りない者でもありますので、みなさんとともにこの品性の訓練を通して神様の御言葉のとおりに変えられ成熟させられることを信じます。

<あなたの品性も変えられる可能性があります。>

韓国のソウルに行かれたことがある方はチョンゲチョン川というところも行かれたと思いますが、90年代、私がソウルに行ったところは本当に汚く、デートの名所とはよう言えないほどの単なる汚い川でした。しかし、今はだれもがみてもきれいで、きれいな水が流れ、いろいろな花が咲いて人々を呼び寄せる美しいソウルのほこりとなっています。多くの国がチョンゲチョン川を研究しているのだそうです。あれほど、汚かったチョンゲチョン川が魚がすみ、きれいな水が流れる川になった理由は今までの汚かった水を流し出し、漢江(ハンガン)のきれいな水を引っ張って供給させ、汚かった水の代わりにさせたからです。ふっと韓国のチョンゲチョン川を思い出しながら我々の変化可能性を考えるようになりました。聖書は人間の本来の心は汚れているといえます。旧約の預言者であるエレミヤはこう言いました。

“人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。”(エレミヤ書17:9)

とつても汚れている人間の心は本当に汚かったチョンゲチョン川のようにでした。その腐敗している心をきれいに浄化させる道は生水を供給させることです。神様の恵みの雨で、聖霊の水を供給させていただくことにより、我々の心は浄化されるのです。むかし、汚かったチョンゲチョン川は臭いし、色んな虫がたくさんいました。問題はチョンゲチョン川の水のせいでした。もはやチョンゲチョン川は臭くもなく、かえて花の香りが放っています。虫ではなく生き生きしている魚が泳いでいます。私とみなさんの心も聖霊の水を供給される時すばらしく変化が伴われると信じます。私たちの中にもキリストの香りが放たれると信じます。もう一つ、チョンゲチョン川の話をしを上げると、その川が変わったせいで、ソウルの気温が2度くらい低くなったそうです。その理由はチョンゲチョン川の前後ろが打ち抜かれながら風が通されるようになったからです。ソウルのチョンゲチョン川の変化はソウル市民の健康だけではなく環境もよくさせ、よい影響を与えることになったのです。同じように我々一人の品性も変えられ訓練されることは単なる自分のためだけではありません。自分の品性の変化は一人だけの変化で留まりません。みなさんの家族、主の教会、みなさんの周りの人々により影響を与えると信じます。神様にあるこの尊い品性を我々が身につけたいという理由は我々にある悪い品性を流すためです。神様の品性を続けて紹介するのはチョンゲチョン川にきれいな水を供給するのと同じです。

愛する信仰の家族のみなさん! 問題が生じる時その原因を環境のせいにししたり、外部のせいにししたり、回りから捜そうとしないでください。我々の問題は厳密な意味でいつも我々のうちにあります。自分の心、品性にあることを覚えながら、今日の品性訓練に参加されるようにお願いします。

<あわれみとはどんな品性なのか。?>

今日は神様の品性の中で、あわれみについてともに考えてみたいと思います。あわれみとは何でしょうか。このあわれみという単語はもともと人の品性に使われた単語ではなく、神様の品性、つまり神様のあわれみをいう時、使われた単語です。まず、旧約聖書で神様のあわれみに該当する体表的な単語がヘブル語で‘ラハミム(rachamim)’、ギリシャ語で‘エレエモン(er eemon)’という単語で、意味は深く愛する、深く同情心を持つ、深い慈悲心を持つという意味です。特に、‘ラハミム(rachamim)’の言葉にはとつてもおもしろく‘ヤフェ(神)の子宮’で象徴的に解釈されてもいます。つまり、神様のあわれみはあまりにも深く、強烈な感情であって、まるで神の子宮が動かされるというふうにし表現ができなかったのです。新約聖書においてイエス様のあわれみを言う時は、‘スプランクニゾマイ(splangchnizomai)’というギリシャ語を使っていますが、これもどれだけ深い意味があるのかをよく表してくれます。ここでスプランクナ(splangchna)’という名詞の意味は‘体の内臓、おなかの中’です。つまり、この単語をまとめてみると、神様のあわれみというのは神様の一番深いところからわいてくる神の品性であり、神様の一番強烈な愛とすべての心を代わりにするものという意味です。

ですから哀れみは子を自分の心臓のように、自分のいのちのように思われる父なる神の愛の心である、つまり自分の内臓がやぶれるほど愛する子にむかってあわれむ心(イザヤ49:15-“「女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。」)といえます。

愛するみなさん、罪人であり、軟弱な我々に対する父なる神様の心を一言で表すと、哀れみ深い父なる神様と言えるでしょうか。あわれみとは苦しみの中にいる人を愛で包もうとする心であり、軟弱な人をかわいそうに思われる父の心です。“彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともなく、まことをもって公儀をもたらず。”(イザヤ42:3)

イエス様はいたんだ葦のような人間をかわいそうに思われ、彼らのいたみをとともにされるためにみずからいたんだ葦のようになりました。そして、くすぶる燈心のような人間をかわいそうに思われ、みずからくすぶる燈心のようになりました。そして、あわれみは苦しみの中にある人と苦しみをともにしようとする心です。私は個人的に一生慕い求めている品性の一つもこのあわれみです。父なる神様が罪人である我々の心といたみを知ってかわいそうに思われる心があわれみであるように、私たちがほかの人々との関係において相手の気持ち、心と共感する力、そしてその人の苦しみといたみに一緒に参加する心があわれみであることが分かります。

神様は父なる神様のあわれみの心を我々が持つようにと願われておられます。神様はいけにえよりあわれみをもっと好まれると今日の聖書の本文は言っています(マタイ9:13)。なぜでしょうか。今日の暗唱聖句であるマタイの福音書5章7節の箇所からその答えを探してみると、イエス様はほかの人をあわれむ人になるとき自分も同じくあわれみを受けるからだとこたえてくださっています。

〈適用:すると我々はどうするば自分もあわれみの人になれるでしょうか。〉

〈1. まず日々神様のあわれみを受ける者になることです。〉

聖書はまず、ほかの人にあわれみを施す者になる前に、我々自身がまず神様のあわれみを受けるべきであることを教えています。神様のあわれみが与えられる時、我々は神様の赦しを受けることができますからです。ダビデは姦通の罪と殺人の罪を犯したとき神様のあわれみによって赦されたと告白しました。(詩篇103:4)我々が救われたのもあわれみに豊かな神様の愛によったのです。(エペソ2:3-5)神様のあわれまれる心が我々になくてはほかの人のためのとりなしも、愛の奉仕も、伝道も正しく行うことができません。あわれみは神様の恵みです。あわれみを受けることは我々の努力である以前、神様の恵みであり、神様の愛からでることを忘れてはいけません。“神はモーセに「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ。」と言われました。したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。”

(ローマ9:15-16)ですから、まず神様のあわれみを受ける者になることがさきです。ほかの人へのあわれみはそれからです。これこそが祝福です。神様のあわれみが我々に臨まれた時我々は、閉ざされた心の扉が開かれ、新しい回復といやしを受けます。そして、その力と恵みと愛によって我々もほかの人をあわれむ父なる神の心を抱くことができるのです。そういうわけで、神様のあわれみを受けるために我々は日々神様の御前にでなければなりません。

“ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。”(ヘブル4:16)

〈2. あわれみの人になるための三つの法則を覚え実践しなければなりません。〉

一つ目、農作の法則にしたがってあわれみをほどこしてください。

“思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。”(ガラテヤ6:7)我々があわれみを施さなければならぬ理由は蒔いたものを刈り取る農作の法則のためです。あわれみを蒔けば、あわれみを刈り取り、ほかの人を批判することを蒔けば、批判を刈り取ります。“さばいてはいけません。さばかれたいからです。あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。”(マタイ7:1-2)

神様の定められた農作の法則は正直です。人生というのは公平ではないかも知れませんが、正直です。我々が蒔いたものはいつかは刈り取ります。良いものを蒔けば、よいものを刈り取り、よくないものを蒔けば、よくないものを刈り取ります。もし、みなさんが神様のあわれみの恵みをいただいた者であるなら、みなさんはあわれみをほかの人にほどこすべき義務があります。イエス様はあわれみを受けた人がほかの人をあわれまないことをたとえて(マタイ18:23-31)教えて下さいました。主人のあわれみによって一万タラントの借金を免除された人が自分に百デナリの借りの人を残忍に扱っている話の中で、あわれみのないしもべに向かって言われる主人の話を聞いて見て下さい。“そこで、主人は彼を呼びつけて言った。「悪いやつだ。おまえがあんなに頼んだからこそ借金全部を赦してやったのだ。私がおまえをあわれんでやったように、おまえも仲間をあわれんでやるべきではないか。」(マタイ18:32-33) “こうして、主人は怒って、借金を全部返すまで、彼を獄吏に引き渡した。”(マタイ18:34)。そしてイエス様は結論を仰せられました。兄弟を赦さない者は父なる神様に赦されることはないという御言葉です。あなたがたもそれぞれ、心から兄弟を赦さないなら、天の私の父も、あなたがたに、このようになさるのです。”(マタイ18:35)

二つ目、黄金律の法則にしたがってあわれみを施してください。

あわれみという品性を身につけ、施すためには蒔いたものを刈り取るという農作の法則とともに黄金律の法則をも覚えなければなりません。黄金律の法則とは自分が願っていることをほかの人にも行えということです。

“それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。”(マタイ7:12)我々は蒔いたものを刈り取ります。そして、我々がほかの人に接するとおりに、自分もそうされます。

ですから、あわれみを施すと、自分も必ず、あわれまれることを忘れないでください。

三つ目、優先順位の法則にしたがって哀れみを施してください。

神様は我々がまずやるべきことがあることを教えて下さいます。それは優先順位の法則です。先に蒔き、先にほかの人をもてなし、先に自分の目にあるはりを悟ることなどです。神の国と神の義をまず求めなさいと言われました。我々がまずほかの人をあわれむとき神様の備えられた祝福を受けることができます。私はイザヤ書58章11-12節に記録されている、神様の祝福が好きで、慕い求めています。しかし、この聖句の前の10節に注意を払わなければなりません。“飢えた者に心を配り、悩む者の願いを満足させるなら、あなたの光は、やみの中に輝き上り、あなたの暗やみは、真昼のようになる。”(イザヤ58:10) 神様はまず我々が飢えたものをあわれみ、悩む者を励ますことを願っておられます。やるべきことをまずやれば、神様は豊かな祝福を与えると約束してくださいました。まずイザヤ書58章10節の実行がさきで、後のイザヤ書58章11節の祝福が待っているということです。

“主は絶えず、あなたを導いて、焼けつく土地でも、あなたの思いを満たし、あなたの骨を強くする。あなたは、潤された園のようになり、水のかれない源のようになる。”(イザヤ書58:11)

ほかの人をあわれむ時、我々の心は和らげられ愛の実を結ぶことができます。ですから、あわれみを施すことはほかの人のためである以前、我々自分のためであることを忘れないでください。あわれみはほかの人の心と共感する力です。相手の話に全部同意する必要はありませんが、相手の立場でいくらでも共感することはできます。あわれみは相手の苦しみに参加することです。あわれみの心があれば、私たちが苦しめている人たちが受ける痛みまでも理解することができます。フランシスは自分の同僚にあわれみについてこのように教えたそうです。

“もし、我々を苦しめている人がいるなら、その人がほかの人を苦しめるために抱いているその心を見てその人をかわいそうに思いなさい。”つまり、ほかの人を苦しめるために注いでいるエネルギー、その荒らされている心の悲劇をみながら、むしろその人をあわれんであげなさいとのことです。

<3.あわれみを施すためには忍耐が必要です。>

神様のあわれみは耐え忍ぶあわれみです。使徒パウロは耐え忍ばれている神様のあわれみを経験されました。イエスを信じる前、彼が教会の迫害し、主の愛されている執事ステパノを石打ちして殺す時さえも神様は待っておられました。彼が主に戻られるまで、彼が悔い改めるまで待っておられたのです。ついに、神様はパウロをあわれまれ、耐え忍んだすえ彼を救われたのです。“「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしよう、まず私に対してこの上ない寛容(耐え忍び)を示してくださったからです。”(第一テモテ1:15-16)

1996年に召された霊性学者であり、イエール大学とハーバード大学の教授でありながら、障害者たちと一緒に生活していたヘンリー・ナウエンはあわれみの道こそが忍耐の道である事を強調しました。“あわれみの道は忍耐の道である。忍耐はあわれみの訓練である。“あわれみ”を意味する‘compassion’という単語を‘com-patience’とも読めるという事実からこれはもっと確実になる。‘passion’と‘patience’という単語はラテン語の‘パティ(pati)’から派生したもので、この意味は苦難という意味である。あわれみの人生というのはほかの人々とともに忍耐しながら生きることである。そういうわけであわれみの道について聞かれたらそれこそ忍耐がそのこたえである。”と言いました。

<4.あわれみを施す王族のような祭司たちになりましょう。>

我々はイエス様を知る前は怒りの子どもたちでした。しかし、もはやいまはあわれみを受けた神の民となりました。

“あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、いまは神の民であり、以前はあわれみを受けない者であったのに、今はあわれみを受けた者です。”(第一ペテロ2:10)

イエスを信じる者は王族のような祭司たちになったと聖書は証言しています。みなさん! 祭司に必要とされる資格があるなら、それは民をあわれむ心です。“私たちの大祭司は、私たちの弱さを同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。”(ヘブル4:15)

我々のやることは互いにあわれみ合うことです。互いに赦しあうことです。“お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。”(エペソ4:32)そして互いに忍びあうことです。

“それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身につけなさい。”(コロサイ3:12)

<まとめ>

あわれみの豊かな者になりましょう。あわれむ者はあわれみを受けます。あわれみの豊かな人は神様の品性をいただき、神様の心を所有するようになります。その心はやわらかく、柔和で、暖かいです。私たちの心がパリサイ人たちのようになかたくなにならないように、心がさめさいように気をつけてください。神様はいけにえより、あわれみを好まれるという御言葉に従いましょう。あわれみの品性こそ人を回復させ、愛を造り出します。あわれみを受けるためには神様の御前でへりくだらなければなりません。神様にあわれみを受けるために神様に近づかなければなりません。父なる神様のあわれみが我々の心にも刻まれますように、それがクリスチャンプレイズチャーチ我々のみんなの品性となりますように主イエス・キリストの御名によって祝福します。アーメン!